
気ままに 会員インタビュー

※会員の入会動機や活動の思い出などを聞きました。



文化財ボランティアの会が発足したのは26年前の平成8年（1996）。
今回は一期生で入会し、今も元気に活動されているSさんに話を伺いました。

【聞き手】

入会されたのは会が誕生した平成8年。一期生なんですね。

【Sさん】

そうです。阪神大震災の翌年でした。

【聞き手】

入会された動機を教えてください。

【Sさん】

長く伊丹に住んでいたのですが、地元のことをほとんど知りませんでした。勤めていた会社を定年退職して、時間に余裕ができたこともあって、なんか学べるところがないかと探していたら、伊丹広報に「第1回文化財ボランティア養成講座」の記事を見つけたんです。

【聞き手】

今も広報の記事を見て、申し込んだ人が多いようですね。養成講座のプログラムは今と同じだったのですか？

【Sさん】

そうですね、全く変わっていません。何回かの講座があって、最後に受講生が文化財の場所の担当を決めて、ガイド実習をしていました。

【聞き手】

当時もガイドは市民も公募で参加していたのですか？

【Sさん】

いや、そのころは受講生だけで、文化財を巡って交代でガイドをしていました。

【聞き手】

最初は何人受講されたのですか？

【Sさん】

受講者は26人でした。



【聞き手】

最近の受講生は10人以下ですが、当時は多かったですね。

【Sさん】

そうです。講座終了後に、「文化財ボランティアの会」を立ち上げたいと社会教育課から働きかけがあって、受講生26人全員が入会しました。

【聞き手】

多かったですね。その時（養成講座）Sさんはどこをガイドされたのですか？

【Sさん】

有岡城跡でした。20代のころから北河原や桑津に住んでいて、その後JR伊丹駅前に移りJR伊丹から大阪に通勤していましたので、住宅から見える有岡城跡が一番身近だったのです。

【聞き手】

入会された頃の活動はどんなでしたか？

【Sさん】

最初は参考にする資料がなかったので、会員たちが文化財の担当を決めて、それぞれが個々に伊丹市史などの書物を参考にしてね、調べていました。

【聞き手】

図書館などで調べられたんですね。

【Sさん】

毎月3回屋外研修として現地に出かけたりもしていましたね。

【聞き手】

ガイドの練習もされてたんですね。

【Sさん】

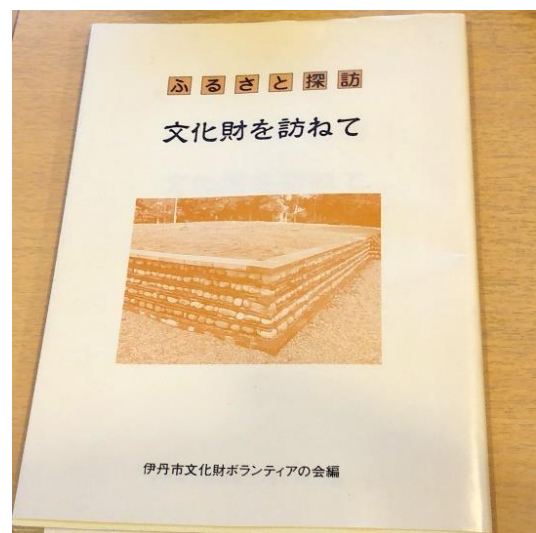
そのころはガイドが目的ではなくて、むしろ地元の文化財のことを勉強したいという気持ちが強かった。各自調べたものを持ち寄って、作成したのがガイドブック「文化財を訪ねて」です。発足した年の11月に発刊しました。

【聞き手】

1年目で、ガイドブックを作ったとは早いんですね。

【Sさん】

最初の会長さんが伊丹の小学校の校長さんを務めていた人で、地元の文化財についてよく知っておられたし、調べたものが本になるというので、みんなかなり熱心だったんですよ。



【聞き手】

教則本のような、共有できるガイドブックがあると、ガイドもやりやすいですね。

【Sさん】

ガイドは自分たちの勉強を発表する場でもあったし…。

【聞き手】

市民からのガイド依頼もあったのですか？

【Sさん】

ガイドの応募もよく入ってきました。養成講座の歴史ウォークは3年目ころから市民に公募するようになりました。

【聞き手】

会で企画して、市民に公募する「市民ガイド」が始まったのは、資料によると平成18年第1回目になっていますね。

【Sさん】

そうだね。その頃からガイドが主になっていったような気がするね。

【聞き手】

そういえば、NHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」が放送されたころはたくさんガイドの依頼があったのですね。

【Sさん】

そうそう、あの年は有岡城跡周辺のガイドがどんどん入ってきて、会員総動員だった。NHKのプロデューサーがやってきて、話をしたことがあったなあ。

【聞き手】

やっぱり、官兵衛が幽閉されたという土牢の場所が話題になったのでしょうか。

【Sさん】

今でもそうだが、その頃はドラマの影響もあって、ガイドでは毎回その場所はどこかと質問されたね。私も有岡城のことを調べていて、この辺りにあったんじゃないかと推測することはあったけどね。教育委員会は、証拠がないとして、土牢の場所は特定されていないという見解だったから、軽はずみに自分の考えは言えないよね。

【聞き手】

20代のころから伊丹に住んでいたと言われていましたが、生まれは伊丹なんですか？

【Sさん】

生まれは大阪の岸里で、小学校まで玉出に住んでいたんです。

【聞き手】

大阪に住まれていたんなら、当時戦時中だったのでしょうか。かなり空襲で大変だったのじゃないませんか？

【Sさん】

国民学校（初等科）に通っていた時でしたね。昭和20年3月13日夜に大阪大空襲があつてね、火の海から脱出した時のことを今でも覚えているよ。父母、妹が不在で、祖父母と弟を抱えて、雨あられと降る焼夷弾の直撃で倒れる人たちをはた目に感じながら、夢中で南へ南へと走ったよ。

【聞き手】

大変な経験をされたんですね。

【Sさん】

B29 迎撃の空中戦の流れ弾に当たりそうになったり、爆弾の直撃を免れたり…。衝撃的な体験で所々記憶が飛んでいますが、九死に一生を得て、生命を貰ったような戦中でした。

【聞き手】

時が過ぎて、戦争体験を語る人も少なくなっていますが、当時は悲惨な体験をされた方が多かったですね。

【Sさん】

その後、縁を頼って、丹波篠山に疎開して、尚武気風の鳳鳴中学に転入学しました。そこでは上級生の厳しい鍛錬に耐えてながら、農業の手伝いをしていました。周りの人たちの厳しさや優しさに支えられながら、校内のクラブ活動に僅かな青春を探しましたね。

【聞き手】

戦後はいつ頃から、伊丹に住まれていたのですか？

【Sさん】

成人してからは伊丹の北河原に移り住んで、桑津の工場に勤めていました。

【聞き手】

何の仕事をされていたんですか？

【Sさん】

会社は日東紡績です。織物の製造加工をする会社ですね。当時は戦後のブームと伊丹市の工場誘致条例とで、伊丹市に数社の繊維工場が連立しました。一時、韓国の企業が太田に工場を作るというので、工程管理を指導するため、1年間韓国に行っていました。韓国から戻ってからは定年まで大阪で働いていました。重厚長大産業が隆盛している時代でね。繊維産業は輸出が中心で、当時はよく神戸の税関に出かけていました。

【聞き手】

定年まで勤められて、退職後に伊丹市文化財ボランティアの会に入会されたんですね。ところで、会報誌の名前が「火曜会通信」となっていますが、この「火曜会」というのはいつごろから使われているのですか。

【Sさん】

養成講座が火曜日だったし、それを引き継いで幹事会や定例会も火曜日に開催していたので、「火曜会」と名付けました。

【聞き手】

現在分科会が4つありますが、どんぐり座と古文書と歴史会に参加されていたんですね。

【Sさん】

そうですね、どれにも参加していましたが、今は体力を付けるのとボケ防止のために古文書だけに参加しています。

【聞き手】

以前、新年会などで狂言や芝居などを演じられていたようですが。

【Sさん】

昭和7年に大阪市岸里（天下茶屋）で生まれて、しばらく母方の家で幼い時期を過ごしていました。母方のお祖父さんが、大谷竹次郎や白井松次郎兄弟が松竹（株）を創業した時以来のメンバーで、歌舞伎座の脚本を担う奥役として勤めていたようです。お祖父さんの家には歌舞伎座の役者や関係の人たちがよく訪れていました。幼いころから、歌舞伎の環境の中に居た感じがしますね。

【聞き手】

そうですね、余興で狂言や劇をされていたのは、お祖父さんの影響だったんですね。

【Sさん】

就職してからは、「労音」や「労演」にはまって、寮生祭などでは同好の友人たちと「ヴェニス商人」などを上演したりしていました。定年後は、伝統芸能に興味を抱きました。脚本・演出・役者に趣味を抱いたのも、祖父の影響があったかもしれませんね。

【聞き手】

今も元気に活動されていますが、何か運動はされてましたか？

【Sさん】

若い頃は身体を動かすのが好きで、会社でバレーボールをしていました。昔は体育館がないので、屋外のコートで市内の自衛隊や企業とリーグ戦をしていましたね。それと、20代のは山登りが好きで、友人たちと北アルプスや富士山などへ出かけていました。

【聞き手】

本格的な登山ですね。一番印象に残っている山はどこですか。

【Sさん】

剣岳に登ったのが印象に残っています。あの時は一緒に行った友人が風邪を引いてダウンしてしまって、ひとりで頂上まで登りました。30歳半ばのころで元気でしたから、青春を発散していました。



【聞き手】

最近、お身体はいかがですか？

【Sさん】

病院通いが多くなりましたね。
解離性動脈瘤で救急車で運ばれたり、バイクで事故を起こして入院したり…。

【聞き手】

そうですね、歳を重ねると、どこかに影響が出るものですね。
ところで、お酒がお好きだと聞いていますが、今は？

【Sさん】

毎晩嗜んでいます。コロナ感染もありますので、最近は外で飲む機会が無くなりました。もっぱら、晩酌を楽しんでいます。

【聞き手】

最後に、座右の銘があれば、お聞かせください。

【Sさん】

そうですね、「温故知新」ですね。

【聞き手】

「故きを温ね、新しきを知る」（過去の出来事を調べて学び、そこから新たな知識を得る）ですね。ちょうど、私たちの活動を表しているような故事成語ですね。
今日はいろいろ聞かせていただいて、ありがとうございました。
健康に気を付けて、活動を続けてください。

了